

## Ⅳ おわりに

新しい学力観に立って、児童生徒がもっている興味・関心を生かしながら、主体的な学習活動を実現していくための指導法を追究してきた。物語や小説を読んでいく中で、児童生徒が自分自身の問題として読んでいこうという姿勢をもつこと、さらに、どのように読んでいけばよいのかという見通しをもつことができることは、児童生徒が主体的に読む学習活動を支えるものである。

小学校の実践においては、自らの疑問のもとに課題を発見し、自らの力で読み進めて解決していく指導を試みた。学習課題を作り、練り上げていく過程においては、時間ばかりかかってしまうことが起こりがちである。その問題点を克服するために、グループで分担して学習課題を作成することも試みた。読み解く学習活動においては、学習経験と子供のもつ興味・関心が人物に向いていることを踏まえ、人物の描写を読み解くカギとして読み進めることにした。また、書く活動を多く取り入れての読み解き、各自の読み解きの修正、深化を図った。自己評価活動は、各自の読みの見通しを修正し、新たな読みの見通しを意識する上で有効であった。自己評価については、次の学習の見通しの修正や新たな読みの意欲につなげるために、効果的な活用を図るようにした。

中学校の実践においては、見通しをもって読み解く方法として、学習課題作りに焦点を絞った。学習課題作りを進める場合、読みの浅い段階で学習課題作りをすることは教師側の意図と異なる学習になってしまうことが起こり得ることである。そこで、文章の内容確認を進めながら学習課題を作る実践と生徒の初発の感想を生かして課題をつくる実践とを試みた。両者とも極めて類似した課題が作られた。読み解くカギを対比、人物描写、情景描写、語句等に求めて、読みの見通しを立てた。読み解きには、グループ選択の方法も一部で実践した。これらの実践を通して、次の二つが確かめられた。一つは、生徒の課題意識を高めていくことが、「読み」の意欲に通じることである。二つは、読み解くカギをつかんで見通しをもったことは、生徒の主体的な姿勢を高めるといえることである。

高等学校の実践においては、教師中心の指導から生徒の活動を確保するような学習指導の改善を図ることを主に実践した。最初に、生徒の着想を生かして課題を設定し、学習プリントを使つての自己学習、グループでの話し合い活動、自己評価カードの活用などを取り入れての実践である。ここでは、生徒の着想を生かして学習課題を設定しながら、生徒自身が学習の見通しをまとめるようにした。読み解きにグループでの話し合いを取り入れたことは、読みの内容を深めることにつながった。学習形態の工夫などは学習活動に変化をもたらし、生徒は意欲的に取り組んだ。次に、発問を工夫して生徒が読み解くカギをつかむようにして、読みの見通しをもたせ、できるだけ生徒が読み解いていく活動を確保しようという実践である。生徒の実態に応じて、教師のかかわり方を工夫すれば、生徒は意欲的に読み解く活動に取り組むことが確かめられた。

要は、児童生徒の実態を踏まえ、興味・関心を生かしながら、思い切って子供に任せる部分と、教師が中心になって導く部分とのバランスを考えながら、児童生徒主体の学習となる指導をさらに進めることである。学習の主体は、児童生徒である。児童生徒の目の高さから、学習のつまづきや喜びを共感的に理解し、見守り、励まし、助言し、教えるという教師の役割を果たしていくことが大事である。高等学校においても、新学習指導要領が第1学年から実施される。小学校、中学校及び高等学校の一貫した教育が強調されている今、ここに共通の課題のもとに研究を進め、それぞれの実践を収録できた意義は大きい。今後ともそれぞれに実践を積み重ね、小学校、中学校及び高等学校の連携を図りながら研究を深めていきたい。